
チートで泥棒ですか？

新巻チビノフ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チートで泥棒ですか？

【Nコード】

N9518X

【作者名】

新巻チビノフ

【あらすじ】

キャラが安定しない。助けて

原作全部読んでないです。今18ぐらいかな？
なので変な所あったら指摘お願いします

コノ作品八作者が無告知失踪ノ可能性ガアルマス
中尉を下さい

伏線がありそうだけど全くないんだなこれが

「あーね、こーこはっーどっこー」

ある真っ白い空間で、ある男の子が左手を胸にあて、右手を広げて頭を気持ち上に向けつつ目を閉じながら歌う様に言う。

「おや、来たかの」

そこにいつからいたのか、否、いなかったはずなのにいつの間にか居た、という表現がふさわしい形で老人が現れる

「あーんさんだーれさん」

対する男の子は片目だけ開き、片頬を上げて笑う

「神じゃよ。突然じゃが転生してみんかね」

神であることをなんともない様に答え、本題を切り出す老人

「あーいいよー」

男の子は苦笑いしながら手を下ろして言う

「5つぐらい力やるがどうする?」

老人の質問に対し男の子は少し考え、聞く

「生またじょーきょーはなーにー?」

「おお、そうじゃったの、お主が行く世界はとあるシリーズの世界じゃ。そして日本人で、性別は今と同じ男、そこで学園都市に入る前提じゃ」

老人はつい忘れてたと言わんばかりな動作で答えて見せる

「わかったー。うーん、やっぱりほしいかなー」
片手で握りこぶしを握り、顎の下を支え、肘をもう片方の手で支えて、眉を顰めつつ言った

「では能力を云うてみよ云うてみよ」
その質問にはにっこりとし、即答する

「うんうん、じゃあーぼくは
時間を戻す力

頑丈で超優秀な体
超高性能な頭脳

D・Gray-manの快樂のノアの能力
自分の能力を融通が効くようにして欲しい・・・かな？」

言い終え、何が面白いのかフフと漏らす

「うむ、分かったぞい。あー時間の方はちょっと手心加えとくからの。それといつまでそんな口調なんじゃ？」

「いーじゃんいーじゃんいーじゃん」

腕を水平に広げ、くるくる回りながら口を尖らせる

「む、ま、まあいいんじゃないかな」

対する老人は少し顔を濡らせたがどこか諦めの色が見えた。そして指を持ち上げ、一振り

「おおおおお?!すごいすごいすごい!滑り台だあああー」
ドップラー効果で声を響かせつつ、男の子は突如現れた足元の黒

い穴に落ちていった

「ふむ、面白い奴だったの。まあこれでわしの仕事はおしまいじ
やの」
ぼん

と間抜けな音とともに煙を出し、老人は消えていった。

いきなりキャラが変わっちゃった件について

(あーらら、いきなりすてられたー)

状況だけを説明すると、彼は満3歳にして、学園都市に捨てられたのだ。いわゆる入学金だけを払い、そのまま親が失踪するチャイルドエラーという存在として

まあ今日が一日目だけど。え？じゃあチャイルドエラーじゃないかもしれない？いやいや、親が相談してるの聞いちゃったし・・・

(まあ関係ないよねー。問題は金があるかどうかだしー)

幸いといえるかは知らないが、彼は能力があつた。

(なんで時戻しの方は使えないのかなー。もしかして学園都市で開発されるパターンかな？)

ノアの快樂が持っていた力だ

(3歳だし銀行行ったら警戒されるかもねー。うん。というか周りの人ガン無視して壁をすり抜けて・・・ってのもおかしいし・・・まあそのための光の透過ってやつですよ)

そして、彼は人が見てないことを確認した瞬間、透明になった

(み、見えない・・・何も見えない・・・こわいこわすぎる・・・

「ん？なんか言った？」

「えー何も言っていないよ、誰かの能力じゃない？」

「あーそうかもしれない。それでねー」

（あぶないあぶない。融通が効くはずだし目が見える様に待つか）

そう思った直後、人にぶつかった。

「ん？なんでだ？」

男の声である

「くう」

思わず能力を解除しようとしたが

・・・

（落ち着け、誰にも触れなければいいんだ）

ザッ、ザッ

男が地面を蹴ったようだ

「チツ、なんだいまのは」

そして男は去って行った。

そしてしばらく経った時

(こうか、やっとコツがつかめてきたぞ)

視覚化に成功したようだ。

(さーて銀行は・・・)

その日、彼は地形に詳しくなった。そして銀行はこのあたりにはないという事がわかった

そしてついに彼は

(・・・食べ物盗むか)

たまたま目についたコンビニエンスストアに向かった。

入る時、彼はドアをすり抜けようとしたが・・・

ウィーン

「いらっしやいませー…あれ？なんでだろ」

ドアのセンサーに引っかかった。

(学園都市・・・恐るべし)

そんなことを思いつつ中へ入ると

(ATM・・・だと・・・)

そんな事に驚愕しつつ、周りを見渡す。誰も見てない事を確認し、

(金だけを掴みたい)

グワシ！つと効果音が付きそうなくらい乱暴に札を取り出した。

総額36万1000円

懐に突っ込んだ。

(ん？これは透明にならない…)

違いを考えようと考えたその時

「あーお金が浮いてるー！」

客がこちらを向いて叫んだ

「チツ」

思わず舌打ちをする

(どうする、このまま金を捨てて逃げるか？いや、一枚だけ持つてけんしょ……)

グダグダ考えてる間に近づいて来た女子学生に掴まれた。

正確には札束を掴もうとしたのだろうが、彼の手ごとつかんだ

「ふおおお」

驚き手を離した時

（今だ！）

札束を放棄し、3歳児は逃げ出したのだった。

寮が見つからないすわー

消えなかった理由を考えてみた。

快樂のノアの能力は選択、通過、拒絶の3つ。

そしてなぜか札束は通過しなかった。服はできたのに…だ。それはなぜか

「発動してる時に接触してないといけない…？」

だがそんな融通の効かない能力ではないはずだ。主に5つ目の願いのせいで。

なら

「選択？」

選択をしなかったからか？

思えばあの時札束を持ってから何も力を使っていない。もしかするとただ触れるだけで能力が発動すると勘違いしていなかったか？

「ありえる」

とりあえず実際に検証を試してみる

あたりを見回し、見えそうなものを見つける

（あの石でいいか）

石を拾いあげ、石ごと光を透過させる

（成功・・・か？）

その後何度も試し、石を持って不良ばい奴の足を殴ってみたら

「いってえ！なんだいまの！・・・誰もいない？くそ！ふざけんな
能力者め！レベル0を馬鹿にしゃがってえええ！」

とまあ、こんな反応を目の前に立って見てたのに無視されていた。

もう一回殴ったがバレなかった。そして相手のリアクションがオー
バーすぎてついに

「ブフ」

思わず笑ってしまった。

「そこかー！」

クワツ！と目を見開き、グーパンを振り下ろす

（触れたくないってね）

スカッ

周りの野次馬ばい奴らも爆笑してる

不良ばい奴は顔を真っ赤にして逃げ出した

「やりすぎたかもな」ボソッ

もちろんバレなかった。

そして気づくと夕方になっていた。

（さて、どこに寝るかだが・・・）

実は、彼は今日ここに入れられたのだ。故に寮に行けばいいのだが・

（ええい、地図はないのか！）

迷子だった。

とりあえず周りを見渡し、人がいない事を確認すると透明状態を解除する。

「どうするか・・・」

「どうするってどうするんですか？」

「ん？」

振り向くと居るのは自分より少し大きな女性。というより女の子だった。

その顔には見覚えがあった。前世の記憶に残ってる情報によると確か学園都市の都市伝説の一人の子供先生だったはずだ。なら頼ってみ

よう

「実は寮がわからないと言うか家出と言うか・・・」

「む、なら私が手伝ってあげますよ!」

ここで年齢に疑問を抱いたフリをしてない事に気づく

「でも、君、何歳?」

「私はもう大学生ですよー!」

ムクツ、と口をふくらませる女の子

「え、うそ」

思わず口に出る。確か原作では壮年に差し掛かってるって言われてたはずだ。なのにいまは20歳前後、そんな馬鹿な!あれ、つまり先生でもない?

「うそじゃないですよ!証拠にほら!」

そういつて見せられるのは身分証明書（ID）

「へー、月詠小萌さんか!。それにしてもホントに20歳前後?」

「そういう君こそ子供にしか見えませんよ!私みたいな感じですかー」

「僕は5歳ですよ。あと今日入ってきたんですが寮がわかんなくて」

どうしようと思わなくもなかったけど一応事実を言っておく

「まだ5歳なんですかー？ダメですよー、こんな暗いのに外出ちや。もう暗いですし今日は私の家に来ませんか？」

「たすかります」

「でも明日はちゃんと寮に戻るんですよー」

「はい」

「あーあーあー、ありがとうございますねー、この子昨日来るはずだったんですがいつの間にかいなくなってる」

「今どこから気をつけてください」

教師？と思われる男の人と女のジャッジメントが話してる間に一応幼稚園を見る。どう見ても幼稚園じゃないでしょこれ

「おい、こっち来い」

なんだこの態度は、普通だったら泣くだろ。

しばらく歩き、建物のある部屋まで来る

「これからお前が住む所がここだ」

「はい」

「うむ、良い返事だ」

中は殺風景でベッドが2つと入り口付近にトイレがひとつ

「つぎは教室だ」

とこんな感じでひと通り回ったが、どう見ても普通の幼稚園じゃない。おかしいだろこれ

授業はこんな感じ

巨大スクリーンがあり、そこではいろんな超能力を使ってる映像が

流れてる

「学園都市と言うのは住んでるだけでこのような力を得れる場所であって、個人差はあるが、だいたい…」

「すげー」

「うん、すごいね」

原作知ってる俺からすれば嘘乙、な話と映像がが続き、実際に超能力は持って当たり前なもの洗脳してるとしか思えない教育の他、薬を飲まないといけないとか言われて怪しい薬を飲まされまくったりした。また、高度で（小学レベル）そこそこのスピードで進む授業

こんなのが続いていくにつれ、ほんとに純粹そうな子が超能力ができる様になったらしい。一人出てから後は芋づる式にどんどん出てきて、俺も本気でこれが超能力得る手段だと思ってしまった。

そしてそれから始まるのが明らかに能力を持つてる方が優遇されているという現実。発現してないほど苦くてまずい薬を飲まされ、飲まなかったら殴られたりするのに、発現した子は殴らない。特にレベル1、2は甘い薬で部屋も優遇されてるらしい。

なんだこれ

最終的には発現しない方は風呂にも入れず、冷水とタオルで体を拭くしかなくなってきた。

この超ストレスの中、俺はもはやノアの能力を超能力と偽るかアイツら全員ぶつ殺そうかと本気で考え始めた。だけど超能力として偽ってもどう計測されるのか怖いし、殺すとかも怖いし、結局こんな

ことならここに来るんじゃないかった、時間が戻ればいいのにと本気で思い始めた。

この時、僕がノアの能力で逃げ出さなかった事は褒めてあげたい気もするし、逃げ出してもらいたかった気もする。なぜならこの極限状態の中、能力が発現したのだ。

きっかけはコロンブスの卵とか無茶ぶりされた時、僕がついに切れて卵を地面にたたきつけてしまったからだ。

この時僕はすぐに後悔し、1分前に戻ってくれーって本気で祈った。そうするとどうだ、なぜか卵が元に戻っていたのだ。

うおおおお！って喜んでたのもつかの間、職員が見てる中、卵が勝手に割れた。それこそ1分ぐらい経った頃に。

何やってんだって殴られるかと思ったら

「これは…能力か？」

「はい、そうです」

思わず答えてしまった

その後は利用価値があったのか知らないが、特別教師とマンツーマン授業になった。

ちなみに先生は木原榊サカキという男で、気さくでいい人だった。一部を除いて

わかる、木原って名前の時点でまともじゃなかったんだ

最初は食器だった。箸の代わりに粉があった

その時あのクソ野郎はこういった

「これは30分前まで箸だった物だよ。だから能力使えば食べれるよ。あ、時間内に食べられなかったら回収するから。」

そう言っただけでタイマーを30分に設置した。

最初は焦ったよ。焦りまくって最終的に手づかみ犬食いとかしながら食べた。食べ終わった後木原どういふ顔してんだろうと気になって恐る恐る見たら笑顔で歯ぎしりしてた。

次の日に電流流れる首輪を付けられた。これは痛かった。勉強は脳の出来がいいのか知らないけどうまくできてたから流されなかったけど、食事はなかなか食べなかった。

そういう日々が繰り返され、ある日俺は思いついた。この勉強もしかして能力に応用できるんじゃないかね？それに気づいてから俺はホントに自分がバカだと思った。なんのためにどう見ても高校生の領域を超えた勉強をしてるんだと思った。俺幼稚園らしいけど。

それから簡単だった。触れてる間にその時間の状態を維持すればいいとわかったからだ。そしてついにそれから数えて6食は初めて普通に食べれた。だけど胃が縮んだのかあんまり食べれず、スープとカロリーメイト的な物を食うにとどまった。

そして7食目で1日前の粉ですって言われて余裕綽々に能力使ったら出来なかった。愕然とした。

ふむ、やはりですね、今日はこれで我慢しましょうとか言われてカロリーメイト的な貰った。泣いた。優しさに

と思つてた頃もありました。超大雑把に時間を指定してできる様にする方法を説明されてから8食目、なんとなくコツが掴めそうだったけど出来なかった。木原さんの顔見たらすごい笑顔だった。またカロリーメイト的なのもらった。

それからまたスパルタ教育で頑張つてついでいくと能力使えなくてもカロリーメイトもどきを貰えると気づいた俺は猛勉強した。それこそ腹減つた時の地獄を知ってるからね、ホント頑張つた。死ぬかと思つた。寝ても勉強してた。俺すげー

そして来る日も来る日もずっと勉強勉強勉強勉強勉強、飯食えそうで食えない飯食えそうで食えない、良い匂いでカロリーメイトもどきを食べる、美味しそうな料理を食べてる木原を見ながらカロリーメイトもどきを食べる、を繰り返した。

いつの間にかカロリーメイトもどきも粉にされてた。またいつの間にか糞尿にまみれてて糞尿を気合で排除して涙目になりながらさくなる予定のカロリーメイトもどきを食べることになつてた。

殺意が湧きそうだったがそのまま続いた。そして気づいたら木原さんと同じぐらいの身長だった。アレから初めて勉強が止まった。木原さんがただニヤニヤ笑いながら外に連れていった。煌びやかな所で知らない人がいっぱい居る。木原さんがこれを302年前に戻してみるというてボロクズを持ってきた。やったら金ピカになった。

すごいすごいってほめられた。これはご飯がもらえるフラグか？って思つてた。

そしてレベルは？って聞かれた。なにそれって答えた

木原さんが焦った顔になった。好きに食っていいぞって言われた。

いつも木原さんが食べてる物があつた。僕は食べてみた。これが木原さんが食べてた物：なんてうまいんだ：そう僕は感動しながらあちこち色々食べてた。どれも感動的な旨さだった。

そして木原さんが来た、連れていかれそうになつたけど食べたい、食べたい、食べたい。

そして木原さんを初めて拒絶した。木原さんが吹き飛んだ

周りがうるさいけど気にせず腹ふく食べた、眠くて：

起きたら知らない人が指示してた。木原さんが怒ってたが、同時に喜んでる様に見えた。僕は前の事を思い出していた。木原さんが吹き飛んだこと：該当することは：なんだろう。

いろいろやった結果、レベル5つて言われた。その後凄く体を動かして疲れた。そのまま寝てしまった。

翌朝起きたら閃いた。僕は転生者で物を通過したり拒絶したり選択したりするノアと呼ばれる旧人類の力も持っていた事。昔の僕は固くなに隠そうとしていたこと。いろいろと思いついてきた。荒巻スカルチノフって自分で名乗ろうって思ってたこと。涙が出た

体が筋肉痛で痛くて動けない。

木原さんが来なかった。お腹すいた

次の日、僕は壁をすり抜け外に行き、透明人間になり、ATMに行き、金を抜き取り、ファミレスで何か食べようと言ってた人について行って、透明人間をこっそりやめてご飯を食べに行った。

ステーキって言う食べ物がすごい美味しかった。5皿食べたけど能力を使わなかった。使つとまたお腹減る気がしたから。

普通に飛ばしていいよね（後書き）

荒巻は現在だいたい12、3歳です。

> 荒巻スカルチノフって名乗ろうと思ったこと
小萌先生に名乗ろうと考えてた偽名でした。今現在本気で自分が荒巻スカルチノだと思ってます。この先変えるつもりは今のところありません

木原さんの災難？

木原神にとつて、その子供に会えたことは神に感謝してもしきれない様なことだ。

きっかけは一人の子供だった。その子供は偶然検査ではわからない能力が発覚し、”全科”をある程度（学園都市基準で）できていた木原一族で落ちこぼれと言われていた木原神に任されたのだ。

今では落ちこぼれと言われていたが、昔は神童ともてはやされていた。なぜならあらゆる科目に手をだし、なおかつそれなりにいい成績を叩き出したからだ。しかし、他の者達と比べ、あまりにも手広くやりすぎたために、逆に専攻がなく、かなり広くそこそこ深いのが、専攻に比べると少し劣ってる、そんな状況に気づけば陥っていた。

だが、それが今功を奏して、その子供、謎の原理で”時を戻す”能力をもつ子供を引き取れた。

木原は考えた、手っ取り早く効果を出すのなら、命をかけてやらせてもいいが、それだと貴重なサンプルをなくす可能性がある、ならどうするか。3大欲望で攻めよう。

そして、木原の挑戦は始まった。まずは今まで学んで来た物で時間と関係ありそうな物をすべて割り出し、そこからまた必要な物を割り出すという、一種の神業とも言える事を実行し、同時に食べ物を能力なしでは食べることでできない状況に陥らせていった。

だが、数ヶ月たったが、なかなかうまくいかない。焦らず焦らずと思っていたが、我慢できなくなってきた。なので、さりげなくある

日、これと時って関係ないか、というようなカリキュラムを組んだ。するとどうだ。突然子供が能力を効率よく使えるようになってきたのだ。

木原は確信した、こいつは天才だと。そして、自らが組んだ理論（中でも簡単なもの）を大雑把に説明してみた。そして、食事の時に臍気ながらも、教えた事を実践しはじめているのを見た。木原は子供を抱き上げてキスしたい衝動に襲われる程喜んだ。

だが食べ物あげたらそこそこやればもらえらると思つて手を抜くのではないか、と頭によぎった。どうしたものかと思つていたら、ふとポケットに残っていたバランス栄養食を思い出した。そこで、彼はそれをあげる事にした。

そして次のカリキュラムも似たような事をし、また能力がうまく出来てきた。彼は内心恐々としながらバランス栄養食を渡してみた。そして次の日も、また次の日も。

子供はみるみる覚えていった。木原は思った。これがスポンジが水を吸い込む様に覚えるというものか、いや、これはもはやティッシュが水を一瞬で吸い込んで行くレベルだ、と。

そして木原は毎日理論を改良し、理論を探し出し、また新たな理論を導き出し…ととんでもない事をしていった。もしこれを知った者がいれば、天才と呼んだらう。同じ木原一族が見れば、二度と落ちこぼれと呼ばないだらう。だが残念な事に、彼はひたすら理論を考える事に夢中で、子供も彼の理論についていこうと夢中だった。

そして10年経った時、彼は理論を完成させ、子供に教え込んだのを見計らったかのように、その晩、木原に統括理事会から直接お声

がかかった。お前の最高傑作をお披露目してみないか、お前を落ちこぼれと呼んだ一族を見返してやらないか、と。

その時彼は燃え尽きていた。だが、同時に彼は自分の最高傑作を他人に見せて、自慢できる。という事にとつもない魅力を感じた。特に自分を馬鹿にした一族を見返せるという部分だ。彼は考えれば考えるほど、自分を馬鹿にしていた一族に怒りを覚え始め、同時に眼の前で見下してやればどれほどの優越感に浸れるだろうと想像し、了承した。

どこから探してきたのか知らないが、320年前のロストテクノロジーらしき物を手渡された。木原はそれを迷わずある理論の名前を言い、子供に渡した。子供は瞬く間に時を戻した。

この時使われた時戻しは、物の時間を230年前に戻し、物に今は230年前だと錯覚させるというオカルトじみた説明しかできない様なまさしく謎の理論だった。だがそれが実際に成功し、周りの会場はざわめき、正体され、やってきた木原一族らしき人物も驚いていた。この時、木原紳は最高に気分がよかった。まるで今までの瞬間を味わうためだけに生きてきたと錯覚してしまうぐらいには。

だがある客による一言で冷水を浴びたような感じがした

「その子のレベルは」と

周りの客は何を言っているんだ、レベル5に決まっているなどと言っていたが、本人はそれ所じゃない。いくらレベル5としか言えない能力も、検査しない限りレベル0と認定されるのだ。彼は急いで検査してくれる所を探しに行った。もつとも、それを見越したかのようにそそのかした統括理事会の一人が電話をし、すでに検査の方

法を確立させてあるし、すぐにでもできるようにしてやるよ。

木原は喜び、すぐに子供を連れていこうとした。

だが子供は食べ物に夢中で木原に気づかなかつた。木原は相手が子供だと考え、強引に連れていこうとしたが、謎の力によって吹き飛ばされた。木原自信は単純な腕力だと考えたようだが。

木原は怒りよりも喜びが出た、なぜなら一切運動をさせていないはずなのに、なんなんだあの力は、全く興味が尽きない。ついでに身体検査をさせようよと。

そして出た結果が案の定レベル5。しかし更に以外な結果が出たのだ。それは体力検査、子供は検査を終えた後気絶してしまつたが、成績は高校一年生の平均よりちょっと上。13歳にしてこの身体能力は正真正銘の化物である。

次の日、木原は日課の理論のまとめをしようとしたが、すでにこの理論は完成している事を思い出し、次は体の方をどうにかしようと思ひ、体についての勉強を始めることにした。その間、子供をどうさせようかとは全く考えず、ただ自分の欲望に突き動かされるがままに動いた。

もつとも、夜になつた時、そのことを思い出し、帰つた時、ジャツジメントからの連絡が来た。

あなたの所の子供がいますよ。と

木原は焦つてすぐに向かうと、そこではのんきに食べかすを散らかしながら眠りこけてる子供がいた。木原は無意識の内に微笑んでいた。

木原さんの災難？（後書き）

メタな話、インデックスが知らない魔術を知ってる魔術で逆算して
ると同じ感じで時に関する情報を得てたわけです。

新たなメニュー

外で遊び呆けてた次の日、僕はビクビクしていた。

なぜなら昨日なにもしなかったからだ。しかも何故かいつの間にか元の部屋。怖すぎる。

だけど木原さんはトレーニングメニューをくれた、どうやらこれをこなせば許してくれるらしい。もしこれを終えれば外に行ってもいいらしい。しかもお小遣い付きで。

本気でやった。半分超えたあたりで諦めた。お腹すいたからだ。

ぐうつうつうつうつ

アホみたいな音が出まくる。

木原さんが入ってきた。例のカロリーメイトもどきを投げた。ただいつもと違うのは大きさだろうか、立て30センチ、横5センチ。板チョコ程度の薄さだけど、自分にとっては十分だった。その後なんか変な色の飲み物も置いていったけど喉乾いてたので飲み干した。そしてトレーニングを終え、寝た。

木原 side

アンチスキルのメニューは手に入らなかった。まあ正攻法じゃ無理だろうけどな。

だがスキルアウトは違う。奴らは時々理想的な体型を持つ者がいる。下手すると下の方の強能力者との差を埋めかねないほどの肉体を持つ者が。そういった奴らのトレーニングメニューを裏ルートで手に入れることができた。実際に計算してみれば理論上あの体になるはずだった。

出来ればの話だが。

正直1.5程度の子供には無理だと思っていた。半分も出来れば十分すぎる。だが奴はできた、とてつもないスピードでトレーニングをこなして行く、それはもはやシユールすぎて面白いくらいだった。ただ、半分ぐらいのメニューを終えた頃、動かなくなった。

さすがに限界か。

そう思った瞬間、ぐうぐうぐうぐうぐうぐうという音がした。思わず笑ってしまった。なるほど、腹が減っては動けぬ、と。

用意しておいた特製バランス食と個人的に考えておいたプロテインを持って行く。

案の定食べ終わるとトレーニングを開始した、そして終わると、眠った。

すばらしい。これは俺が運が良かったと言わざる負えない。ここまて来ると悔しいがこれは俺ではなくあいつの才能だ。本当に悔しいが天才とは本当にいるものだ。だが、その天才を見事に磨き上げるのは俺だ。これは今更他の奴らにはやらん。さて、違う理論でも組んでみようかな？

新たなメニュー（後書き）

3歳時に5歳と名乗ってたので今は13歳ですが15歳とされています。

本人が3歳児らしくないのでそう思われています。

書類上の云々言われたらおしまいなんです。スルーしてくれると幸いです。

木原さんは確実にご都合主義レベルの天才ですが、ご都合主義の天才が近くにいるので、自分は天才じゃないと考えております。

自由時間

最初の2、3日はきつかったけどだんだんすぐ終わるようになった。ときどき木原さんが能力の発展型の案って奴を持ってくるけど幾つか意見を出すとまた持って帰っていく。

そんでメニューはすぐ終わるから能力使うだけだと暇だなーって思って実際に木原さんに言ったら待ってると言だけ言って出ていった。

しばらくするとお金の束をくれて遊んで来いって言われた。お金ならまだ余ってるのになーと思いつつわかったと答えた。

札束の端っこを右手で持ち、ひらひらと左手に叩きながら歩いていたら、なんか顔が怖いお兄さんがちよつとついてこいの事を書いて人の少ない所に連れていかれた。

何だろうってクビを傾げてたら金よこせって言われた。腹たったからお腹を殴った。うずくまっちゃった。追い打ちかけてみようと考えたらテメー！とか言いながらグーしてきた。

メニューの内容を思い出しながらやってみるとバシーンとぶっ倒れて動かなくなつた。あれーとか思いながらもう一人で試そうと思ったら逃げちゃった。

諦めて良い匂いのする方に歩いていった。

クレープというのが美味しかった。明日こそ全種類制覇する。

木原さん曰く

考えた物を理論化しようとし、ツリーダイアグラムに申請したが、どうしても失敗と結果が出る。癪だが他の奴らに聞いても理論的には間違っていないと言うか、見当違いな指摘をするばかりだった。まるで科学的に説明できない法則があるかのごとく完成しなかった。

まあ学園都市の技術でもできなかったのだろう。仕方ない。気まぐれであいつの意見を聞いて参考に見たら、ツリーダイアグラムの計算結果ではものすごいめんどくさいが科学科学の法則でもどうにかものばかりだった。もしこれが狙ってやったものだったらあいつはやはり化物だ。

やはりその化け物具合がわかってるのか他の研究所からのちよっかいがやけに少ない。というか無い。いくら8位だからと言ってもレベル5と言ったらかなり魅力的なのに。有ると嫌だがここまでアプローチがないと逆に悔しい気がしてくる。そんなに嫌か。

自由時間（後書き）

長く書きたいのにかけないわ。原作はちよっかいだすと絶妙なフォ
ローがないと高確率で崩壊するから困る。書きづらい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9518x/>

チートで泥棒ですか？

2011年11月22日01時11分発行